

キャンパス・コラム

具体的なストーリー

理工学部まで片道約2時間、実に一日の六分の一を主に通勤電車の中で過ごしている。人は同情するが、慣れるとどうということはない。何よりゆっくり本が読めるのがありがたい。週に2冊くらいは読んでいるから、年間百冊にはなる。こういう楽しみを知ってみると、「昔はものを思わざりけり」と感慨ひとしおである。特に面白いと思うのは、新聞あるいは本などで読んで概略を知っていた事件を内部で実体験していた人が書いたものである。例えば、大韓航空機事件の金賢姫が書いた『いま、女として』、警備畑の佐々淳行氏の『東大落城』、『連合赤軍「あさま山荘」事件』、あるいは地下鉄サリン事件の林郁夫の『オウムと私』など、当事者でなければ全く考え及ばないことばかりで驚いた。いろいろな角度から見てみないと真相は分からないものである。

以前ある作家が、若者の「戦争でひどい目に

遭った人はいくらもいたのになぜ『アンネの日記』ばかりが大きく取り上げられるのか」という疑問に答えて、「人間の想像力なんておおよそ貧弱なもので、具体的なストーリーを通じてしか人はものごとを理解できないからだ」と書いていたのを思い出す。なるほどそうか、と思った。

理工系でも同じで、具体的な研究課題に取り組んで、ああでもないこうでもないで悩みつつ、余分な手間ひまをかけないと、物質に関するごく簡単な事柄も分からないものである。教科書を読んで頭では理解したつもりでも、身にしみて「分かった」という感じからはほど遠い。

ところで、アイデアが湧きやすい場所には鞍の上(通勤途上も)、枕の上、後架の中の三つがあると云われるが、これは身体が軽い束縛を受けていて、専ら想念が自由に飛びまわれる状態だからであろう。大学生の生活も似たようなもので、社会人に比べて束縛はずっとゆるやかである。卒業研究などの機会を生かし、何か一つ具体的な課題に取り組んで知識を深め、様々な角度から世の中を理解して欲しいものである。

広報委員 新藤 斎(理工学部教授)

編集後記

昨年、21世紀最初の年「始めよければ・・・」という言葉がなぜか空しく響くように、テロ、戦争、不景気、失業など暗い話題ばかりが目についた年でした。そんな世相が求めたのでしょうか「陰陽師」という映画が大ヒットしました。同じく「ハリポッター」の魔法の世界、「千と千尋の神隠し」の不思議の町など、現実世界とかけ離れた世界に人としての本当の生き方、真実を模索した年だったのかも知れません。▼現実に戻れば、まだまだ暗い話題が続いています。しかし、その中でも確実に近づいている素晴らしい現実があります。それが日韓共同開催のサッカーワールドカップではないでしょうか。たとえフリーガンや赤字開催など、マイナスの課題が浮かび上がったとしても、人の気持ちを熱くするこの大会の意義は、日本と韓国という2つの国だけでなく、世界の人々の心を一つにする最高の舞台になると思えるのです。新しい年、一人でも多くの人が、この一体感を共有できることを願っています。

(広報課)

Hakumon
ちゅうおう

2002・1月号(第172号)
2002年(平成14年)1月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12
電話 03-3631-8141